

人物で語る 日本デンマーク

②5

板倉源太郎

市街地から新城方面へ向かい、「今池町三丁目」の信号を過ぎると、道は二又に分かれている。右手の道の傍らに大きな松の木がそびえている。道路際の駐車場の南端には、秩父宮両殿下視察記念碑やヒットラー・ユーゲントの視察記念碑が建っている。近くの看板に「板倉」の文字が見える。

この付近、明治用水中井筋北側一帯に板倉農場があった。今では民家やマンション、工場までも立ち並んで、ここに農場があったとは全く想像もつかない。

源太郎は開墾を終え、地主神谷八郎の小作人の支配役、また、リーダーとしての立場を自覚して、自小作農を始めた。裏作を含めた六町歩余りを一か所に集め、家族と男使用人一人の四人で働いた。

用水が引かれて、米が作られるようになって。農場も米ばかりを作っていた。その後二毛作が奨励され、麦や紫雲英（レンゲ）を作るといような単純な経営であった。

一九〇四、五年（明治三七、八年）ころから西瓜の栽培を始め、その後作として大根や白菜を作った。一九一〇年（明治四三年）には肥料の自給を目的に養豚を始め、一九二一年（大正元年）に牛一頭を飼って、畜力を導入した。一九二五年（大正四年）に梨、一九二八年（昭和三年）に独活（ウド）、一九二九年（昭和四年）には柿を植え付けた。

米作り一辺倒を二毛作にし、また、西瓜のほか野菜を栽培し、さらに果樹を植え付けるという経営の複式化を実践した。

この辺りの土地は瘦地だったので、何をやるにしても、たくさん肥料が必要だった。しかし、肥料代の割に収穫量は少ない土地だった。そこで、養豚を始めて堆肥を作り、肥料代の節約と地力の増進を図ることにした。



牛による田草取り
（歴史博物館特別展「日本デンマークの姿」図鑑より）

また、牛は田おこしだけではなく、夜間に糶摺りや精米・精麦にも利用した。手製の機械ながら、人手頼りの手臼よりはるかに能率が上がった。

一九二三年（大正二二年）二月、源太郎は模範的農家として愛知県知事から表彰を受け



『板倉農場誌』歴史博物館蔵

安城を紹介したため、どこよりも豊かな農村として名声を高め、視察者が訪れるようになった。視察者は、一九二八年（昭和三年）までに一万人に達し、一九三〇年（昭和五年）には一万二五五人と前年の六四六四人に比べ倍増し、翌年も一万一八〇〇人と増加した。（『板倉農場誌』昭和五、七年版）

第一次世界大戦中の好景気の反動は、物価の上昇、凶作による米価の暴騰、そして昭和に入って一九二九年（昭和四年）の世界恐慌、一九三二年（昭和六年）の農業不況という激しい不景気を招いた。

このころ、新しい農業を求める動きが大きくなる中で、全国から視察者は絶えることがなかった。代表的な農家として板倉農場を必ず見学したのは、農場が新しい農業の方向を指すものとして注目されていたからであった。

た。また、このころから安城の農業が日本デンマークと広く紹介される一方、山崎延吉が各地の講演旅行の中で、模範的な農村として

文 中村幸雄